

「グローバルな視座からみる南北アメリカの中国人：20世紀半ばにおける大英帝国の連結する政策、植民地環境と社会空間と
中華民国僑務の越境政治」ならびに「南北アメリカ華僑と近代
中国：19世紀トランスナショナル・マイグレーション」の講演
‘The Chinese in the Americas in a Global Context: Connected Policy, Colonial Milieu and
Social Spaces of British Empire and Chinese Nationalist Party’s Transnational Politics in
the Mid-Twentieth Century’ and ‘Overseas Chinese in the Americas and Modern China: The
Transnational Migration in the Nineteenth Century

H30海人13

派遣先 サンマルコス国立大学グローバルヒストリー国際セミナー
(ペルー・リマ)

期 間 2018年10月23日～2018年11月4日(13日間)

申請者 兵庫県立大学 経済学部 経済研究科 教授 園 田 節 子

海外における研究活動状況

研究目的

- ①サンマルコス国立大学国際セミナーにおける講演—2016年より同大学マルドナード准教授が主導するグローバルヒストリー国際セミナーで、2018年11月回の講演を担当し、学生に2日間、華僑華人史グローバルヒストリーの英語講義をおこなう。さらに同大学の準備した歴史地区巡見から、グローバルなペルー華僑史の位置づけを考える。
- ②リマ華僑社会での史料調査—リマの華僑団体にアクセスし、ペルー華僑がコミュニティ内部で発行、蓄積した中国語史料を調査収集する。

海外における研究活動報告

1. サンマルコス国立大学グローバルヒストリー国際セミナーでの講演
講演は概ね順調であった。第1日目は、19

世紀における南北アメリカの華僑華人コミュニティの形成と、清朝の外務官僚が華僑政策を通じていかなる制度を複数の移民社会内部に越境させたか、トランスナショナリズムについて講じた。講演では、中国は遠隔地の海外移民を出身国につなぎとめる試みを最も早くおこなった国家であり、現在も大陸と台湾双方が展開する華僑政策の起源であり、21世紀にペルー、ブラジルが中国のそれと酷似した政策概念で在外国民を自国に繋ぐべく試みている事実を指摘した。第2日目は、1930年代の英領西インド諸島華僑社会で国民党僑務委員が展開した華僑政策を中心に、20世紀における中華民国と南北アメリカの華僑華人の相互関連性について講演した。英領西インド諸島に派遣された国民党員は東南アジアの英領植民地で華僑教育に従事した経験があり、カナダ・英領マラヤ間に類似例があると示しながら、英領植民地の社会・制度・文化的な横の繋がりに中華民国の華僑政策の人材や情報が連結し、重なると論じた。

学生の反応は当初、消極的であった。オーガナイザーのマルドナード准教授が設けたりマ歴史地区巡見の折、ペルーは北米や中米に比べ諸地域との交流が限られ、移民一般への関心が低いと感じた。よって、質疑応答時間に、個人を追って国民国家が越境する現象を長期・広域スパンで考えるよう促し、さらにペルーの外の世界を知り、多くの他者の経験を自ら追うと、移民や越境性のグローバルヒストリーの面白さを理解できる、問題関心は環境と経験に多分に限定されることを自覚して大学生として知を押し広げるよう強調した。講義終了後、日系を含む10名近い学生が質問に列び、40分以上質疑応答・交流をした。出国した移民をつなぎとめようとする国家側の原理は何か、中国系と日系移民の子弟教育の相違点は何に基づいて生じるかなど高度な質問があった。

報告者にとって初の海外招聘講義であり、かつ初の南米スペイン語圏であったため、英語圏と異なる時間感覚や価値観・文化ゆえ、多くの不測の事態に見舞われ、臨機応変の対応を要した。例えば、依頼時は、歴史学を専門とする大学院生10人程度に2日間、夕方の英語講義との条件であった。しかし講義前日にオーガナイザーが、初日は30人、2日目は60人それぞれ別グループの社会科学系学部生に午前中講義すると通達してきたため、急遽内容を簡略化した。さらに講義初日の開始直前にオーガナイザーが、学部生の英語力が充分でないとスペイン語通訳を挟んだため、実質的な講義時間が削られ、かつ通訳の英語力不十分のため進行が混乱した。その場でパワーポイントの要点を平易な英語で説明し、オーガナイザーの通訳時間を設け、その後ペースを維持した。

サンマルコス国立大学側は留学生派遣などの国際教育を展開する場合、報告者の将来的協力を期待しており、今後もメールを介してグ

ローバルヒストリー教育で連絡を保つ。文化的差異に目配りしながら関係を築く必要性を痛感したため、慎重に対応する。

2. 現地華僑の調査

リマでは、最古の統括団体中華通恵総局、広東客家の同昇会館、中国系ペルー人団体Asociación Peruana China、中華三民聯校に史料を打診した。機関紙などは入手したが、史料への直接的アクセスは同昇会館以外は困難で、諸団体の現在の活動をフィールド調査し、友好関係を深める。同昇会館は毎年旧正月に関帝像神輿行事、Asociaciónは2019年に中国移民ペルー上陸170周年記念行事を予定しており、現地連絡者から開催情報を今後段階的に得て、改めて現地入りし、さらなる体系的な調査研究の申請に繋げる。また民国僑務の実証研究を深める必要性を感じ、『民国華僑史料続編』を購入した。

なお国立民族学博物館の国際シンポジウムで南北アメリカの客家セッションの司会兼コメンテーターを務めた折、本調査を踏まえ、同地域ではクレオール化の議論が必須になるなど有意義に助言できた。

この派遣の研究成果等を発表した 著書、論文、報告書の書名・講演題目

- 1) サンマルコス国立大学グローバルヒストリー国際セミナーでの講演題目—第1日目：New Themes in Transpacific History: Interconnections between Chinese Transnational Institutions and Nation-States and Chinese Communities in the Americas in the Nineteenth Centuryならびに第2日目：Interconnections between Nation-States and Chinese in the Americas in the Twentieth Century
- 2) 2018年12月15・16日国立民族学博物館の国際シンポジウム「客家エスニシティとグローバル現象—華僑華人の拡がり」と現在」の「アメリカ大陸の客家」の司会兼コメンテーター (<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/news/rm/20181215-1216>)